

万葉の川心

株式会社ISC ウイズブック保育園

澤井園子

久邇の新しき京を讃めたる歌

(巻第六 一〇五八番歌)

狛山に 鳴く霍公鳥 泉川

渡を遠み 此処に 通はず

突然に夏が来た。こんなに短い梅雨は今までであったのだろうか。水分補給、空調管理、暑くても進む食事は…。あまりに突然過ぎて、体調を維持するごとに必死になっていた。もう少し、夏が来るのを楽しみにしたかった。ぎらぎらと刺すような日差し、庭先でビニールプールに水を入れるお母さん、いつもより短くしてと頼む床屋、目を引く「氷」の旗、生ビールと枝豆、「冷やし中華始めました」の紙。あなたにとつて、夏のしるしとは何だろうか。

「狛山に鳴く霍公鳥は、泉川の渡場が遠いからか、ここには通ってこない」とよ。七四四年、久邇京は廢都となった。大宮に仕える人は難波皇都に移り住んでしまった。都の風流さを象徴するホトトギスは、もはや通っては来ない。でも、ここ久邇の地は山高く川の瀬清く、本当に住みやすい土地だと、続くとよ。一〇五九番歌でもほめたたえている。

霍公鳥はヤマホトトギスとも言われる渡り鳥である。万葉集の中で最も多く歌われる鳥で、一四〇首ほどある。この歌の作者ではないが、大伴家持がホトトギスを詠んだ歌は六四首あるといい、家持が詠んだ動物の歌の中ではホトトギスが最も多い。特に越中守時代の五年間に多数あり、その理由は都の風流なものを想い起こしたからなど諸説ある。ホトトギスの声を聞いたら

夏が来たしるしであり、立夏の前夜から夜明けの初音を聞こうと待ち構えるほどであった。そして、「羽触りに散らす(羽が触つて散らす)」「立ち潜く(間をくぐる)」「声の遙けさ」「はろはろに鳴く」などの表現を生み出した。都を離れ、都を恋しく思うからこそ生まれ出る表現がある。逆境、苦痛、怒り、苦しみ…文学は、人がもがいた先に見える、一筋の光のように生まれるとも言える。その人がもつ、目には見えない深淵の海が、人の心を震わせる一文を生み出す。

泉川は、泉の地を流れる木津川で、奈良の宇陀に発して伊賀を過ぎ、泉を通り、木津から北流して淀川に合流する。家持が越中に赴任する時、弟の書持が見送りに来て別れた場所も泉川であった。そして、赴任中に弟を亡くしたのであった。また、泉川は木場としての側面もある。木津というのは「木の港」の意であり、巨椋池から泉川を遡上して現在の木津付近で陸揚げされ、山を越えて平城京へと運搬されていた。写真の碑は、木津川市山城町上狛の山城郷土資料館にある。

やっばり森に行こう。そして、川に行こう。街の日常にある夏のしるしも魅力的だが、自然の中にこそ、本当に望んでいた夏のしるしがあるような気がする。



京都府木津川市山城町山城郷土資料館前にて